
雪

美花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪

【コード】

N3025B

【作者名】

美花

【あらすじ】

詩みたいになってしまいました(^^)・良ければ読んで下さいね。

雪が降っている

はらはら

はらはら

まるで天使の羽みたい

だからなのかは分からないけど、昔、私は雪が大好きだった

はらはら

はらはら

天使が、幸せを分けに来てくれてるみたいだから

「独りじゃないよ」

って、言いに来てくれてるみたいだから

親が共働きで、寂しかった私には、その冷たい雪が温かく柔らかなものに思えた

だから私は雪に

「ありがとう」

って返したくなるんだ

でも

今はそんな雪さえ嫌いになってしまいそう

貴方のたった一言で

何年も雪の事を思い出さずに、それでも耐えてこれたのは、貴方がいたからだったのに

「実は、他に付き合っていた人がいるんだ」

それで？

「彼女を選びたいと思う」

だから？

「別れてくれ」

なんて安い言葉

何の感情も込もってないことが、伝わってくる

彼はそのまま

「じゃあ」

って、軽い言葉を残して去っていく

私は最後まで涙も流さずに彼の背中を見送っていた

彼の姿が見えなくなってから、私はフラフラした足取りで近くの

ベンチまで向かい、崩れる様に座りこんだ。

彼との初めてデートを思い出す

カラオケやゲーセンなどたくさんたくさん遊んだ後、まだ帰りた
くなくて、近所の公園のベンチにこんな風に一緒に座っていた

世界は静かで

優しくて

恋人達の幸せを祝福してくれているようだった

そこで初めて、彼が優しいキスをくれた

フワ

うつ向いた視線の先に、濡れた指が映った

涙…？

違う

「雪」

だ

フワフワ揺れる真っ白な雪が、私の掌にゆっくり落ちていった

ああ

また

側にいてくれるんだね

静かに優しく降り注ぐ雪の中で、私はいつまでも声を上げて泣いた

雪はいつまでも側で揺れてくれた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3025b/>

雪

2010年10月11日00時34分発行